

## 新たなスポーツ文化の創造に向けて

的地 修

スポーツ開発・支援センターの2009年度事業の公開講座・シンポジウムは「新たなスポーツ文化の創造」をテーマに4月22日、本学大ホールでスポーツメーカー、ミズノの会長で日本オリンピック委員会(JOC)の水野正人副会長、日本サッカー協会の田嶋幸三専務理事、キリンビバレッジ広報部長の坪井順子氏の3氏を招いて開かれ、滋賀県体育協会関係者や本学学生ら約400人が参加した。公開講座の前半は水野会長と田嶋専務理事による基調講演。後半が本学トレーニング・健康コースの若吉浩二教授がコーディネータになったパネルディスカッションで水野会長、田嶋専務理事、坪井広報部長の3氏がスポーツ界の未来と夢を語った。



シンポジウムの様子

基調講演の水野会長は開口一番、「Yes We Can」と米国のオバマ大統領を真似て

スポーツ界の変革に目を向けたスピーチで会場の雰囲気のを和らげた。ユーモアにあふれた水野会長のトークは、中高年の健康からエリート選手の育成、スポーツ施設と環境問題やさらに自らが情熱を燃やすオリンピック問題まで多岐にわたった。中高年の健康では「PPK」を問いかけ、きょんとする学生らに「いまの時代、若いうちは元気はつらつ、愉しく生き、年老いたら長患いで寝たきりになるよりも気持ちよく死にたいというピンピン、 कोरोリの人生が理想です」と笑いを誘った。高齢化社会を迎えて快適な人生を送るためにスポーツは欠かせない伴侶としたうえで、スポーツの価値として「戦う力(ファイティングスピリット)」「フェアプレー(思いやり)」「フレンドシップ(生涯の友、仲間)」をあげた。この3つの要素からスポーツは社会に力を与える源と強調し「オリンピックが最も大きな力を持つ」と五輪運動を推進するJOC副会長の立場で五輪の魅力を伝えた。

2016年の五輪開催地に東京が名乗りを上げ、シカゴ、マドリード、リオデジャネイロを加えた4都市の招致レース(10月2日のIOC総会でリオデジャネイロに決定)に話題を発展させ、2度目の東京五輪開催への夢を語った。「東京都がアピールするオリンピックは、選手村と競技会場がコンパ

クトにまとめられている。さらに21世紀のオリンピックは地球温暖化防止など環境にやさしい五輪が必要であり、東京五輪が実現すれば世界のモデルになる」と期待をかけた。また、五輪に集うトップアスリートの魅力について、08年の北京五輪を振り返りながら「陸上スプリンターのボルトのように新記録に挑んだり、金メダルを手にするスーパースターは目が違う。のびのびと生きているからこそオリンピックの大舞台でも力を発揮できる」と話した。将来を担う学生たちへのアドバイスにもトップアスリートを見習って「社会に出てものびのびと生きる。難問にぶつかってもびくびくしてはダメ。スポーツをするとき、みんなはそこにスポーツの価値を見出し、自信と誇りを持ってプレーするはずです。同じように社会に出たなら、自分の仕事に誇りと責任を持つことが大事。スポーツでベストを尽くすのと仕事でベストを尽くすのも同じ気持ちでがんばって欲しい」と勇気づけた。

日本サッカー界の知恵袋ともいわれる田嶋幸三氏は、スポーツ開発・支援センターが取り組んでいるびわスポキッズプログラムをテーマに「日本ではたくさんのスポーツが芽生え、発展してきたが、残念ながらまだスポーツが文化になっていない。スポーツを通じて全ての子どもに夢を持たせるような活動ができれば、スポーツ文化が根付く。日本サッカー協会が取り組んで全国に普及させているサッカーのキッズプロジェクトには、日本にも欧州のようなサッ

カー文化を定着させようという願いが込められている」と訴えた。公開講座に先立って田嶋氏らは、本学サッカー部が堅田地区の保育園、幼稚園で取り組んでいるびわスポキッズプログラムを視察。学生らが創意工夫を凝らしたボール遊びなど学生と子どもたちのスポーツを通じた触れ合いに目を細め「スポーツ大学がこうした形で社会貢献することがスポーツ文化の芽生えにもつながってくる」と賞賛した。

基調講演の後、本学競技スポーツ学科の若吉浩二教授による司会でキリンビバレッジの坪井氏を加えたパネルディスカッションが行われた。新しいスポーツ文化の創造について、坪井氏は「体の汗、頭の汗、心の汗を流してこそ、文化創造の道が開ける」と語り、田嶋氏は「子どもに夢を持たせる取り組みが本当に大切な時代になった。スポーツ界はこうした時代の要求にしっかり応えていかなければいけない」と強調した。